高等学校「総合的な学習の時間」における協調自律学習

～チーム学習による授業デザインと実践～

齊尾恭子（大阪国際大和田高校）　市川隆司・長尾　尚（大阪信愛女学院短大）

＜あらまし＞本研究の目的は，チーム学習という形態を活用して生徒の自己肯定感を高める授業をデザインし，その効果を検証することである。協働作業を通してコミュニケーションスキルの習得を中心に授業を実践した。まず多様なメンバーで構成される「チーム」を編成して，各自が明確な役割を分担することから始め，チームで毎時設定された課題解決にあたらせた。普段は交流の少ない級友との作業に最初は不安を覚えながらも，徐々に解消され，自己の役割を果たす方向に向かった。その結果他者の思考へ関心と信頼を高めて，多くの生徒が達成感のあるチーム活動を行うことができた。生徒たちはチーム学習の意義を認め，学習意欲を高める方向にあることが示唆された。

＜キーワード＞チーム学習，協調学習，総合的な学習の時間，コミュニケーション能力

１．はじめに

土井（2008）は，「クラスの内部においてすら人間関係の相互交流が難しくなって，ごく狭い範囲での関係の固定化が進んでいる」といっており，級友でも全く会話のない生徒たちがいる現実がある。 彼らはそれを「合わない」と表現し多様な人間性を受け入れる素地が育っていない。

私学で中学校段階から習熟度別クラス編成が取られている場合，学習に対する無力感が増大して学習意欲も低下している生徒が少なからず存在する。そういった生徒は教科の学習内容に意味を見出せずに日々授業を受けている。

受け持ちの生徒たちの多くにも同様の状況が見られる。そこで担当する「総合的な学習の時間」を通してこの状況に少しでも学習意欲に改善が加えられないかと考え，昨年に引き続きチーム活動を取り入れた授業実践を行った。

２．研究のねらい

佐藤（2004）は，授業改革の中心となる要素として「何らかの作業や活動があること，三人から五人のグループによるイメージや意見のすり合わせがあること，そして多様な思考を表現し交流して各自の思考を吟味するコミュニケーションが組織されることの三つの要素」をあげている。

さまざまな学習場面に共通する基本的な学習スキルを獲得することによって学習意欲を高め，学習活動への信頼を回復することが重要であると考える。そのために生徒たちが学びのよろこびを体感し，各自の自己肯定感を高めていく授業をデザインすることを目的とする。１学期は学習スキルの中でも，集団で協働していく上で必要なコミュニケーションスキルに焦点をあてた内容に取り組み，チーム活動をどの程度まで自主的に行えるかを検討した。

３．実践内容

吉崎（2008）は，魅力的な授業をデザインするためには，教師の思いや発想が十分に生かされなければならないと言っており，吉崎の「授業デザイン」モデルに沿った授業デザインを図１に示す。また実践の概要を以下に，具体的な授業内容を表１に示す。

・実施時期：１学期（9 回）
〔週１回（50 分）通年授業〕
・実施対象：２学年５クラス（187 名）
・使用教室：特別教室（固定）
・１チーム生徒数：５～６名
・使用機器：プロジェクタ，ノート PC,
実物提示装置，スクリーン，コールベル，
CD プレーヤー，キッチンタイマー

チームを編成するにあっては，生徒一人ひとりのコミュニケーションタイプを質問紙調査し，その結果を基本にチーム編成した。ただし編成

①授業に対する思い
学習意欲の低い生徒たちの教室で行われる「授業」に対する信頼を取り戻したい。学校の授業が，社会の変化に的確に対応しており，実社会に出た後に役立つスキルを学ぶ場であるということを体感してほしい。「大学入試」ではかられる能力以外にも，人間が生きていく上で必要な資質やスキルがあるのだという価値観を提示したい。

②授業の発想
生徒たちが社会に出て，戸惑うであろう要素を絞り，それに立ち向かうために必要なスキルのトレーニングを授業で実施してはどうか。具体的には，異なる背景を持った多様な人々と，協働作業が可能となるコミュニケーション・スキルのトレーニングや物事を個々の事象として捉えるのでなく，そのシステムやメカニズムを見抜いていくために必要となる思考ツールを活用する技術のトレーニングが必要ではないか。

⑤日常生活での問題意識
日常的な風景として，学習意欲の低い生徒が授業中に取る態度は，次の３種類に大別できる。
１）教師に対して攻撃的な態度を取る　２）私語に夢中になる
３）無気力に机に伏せって眠る
このような授業における生徒の状況を目の当たりにするにつけ，学校での「学び」に対する信頼感を回復できる授業を実施したいと考えるようになった。
また，生徒を激励したとしても「どうせあかんねん，できへんねん」と無力感に苛まされている様子が多く見られ，彼らの効力感を高める意味で，現行の「大学受験」対策のための「模擬試験」「学力試験」での偏差値以外にも評価軸が存在するのだということを提示できる授業をデザインしたいと考えるようになった。

③授業の構成
●授業の形式ーワークショップ型授業
●教師の役割ーリーダーシップ的な要素を含んだファシリテータ
１）授業の目的と，得られるスキルを明示する
毎時冒頭で，「本日の授業で体験する内容は，社会に出た後，こんな場面に直面したときに役に立ちますよ」と具体的な事例を提示し，授業を通じて，どのようなスキルを得ることができ，そのスキルはどのような場面で活用できるかを必ず解説した。
２）生徒同士が承認・賞賛し合える仕掛けとしての，役割分担が明確な“チーム”活動。
生徒が自分の存在意義を感じたり，自分に自信を持てたりするには，級友からの承認・賞賛が大きい。そのため毎時のチーム作業において，タスクを細分化し分担内容を明確にすることで，必ずすべての生徒がチームに貢献できるよう配慮した。そして，教師がそれぞれの役割の大変さや重要性を解説し，「〇〇係さんがこれを果たしてくれなければ，この作業は成り立たなかった」ということを認識させるようにした。

④授業で用いる教材の開発
コミュニケーション・スキルの向上と思考ツールの使いこなしを目的としているので，フィンランド式の小学生向けの教材からテーマを選び，同じような内容の企業向け新人研修教材を探して，生徒が授業で使用するワークシートの作成の参考とした。

図１　吉崎の授業デザインモデルへの適用

にあたっては，コミュニケーションタイプの調査結果，男女比，所属クラブなどに加えて，昨年度はなかった自己効力感の調査，最終成績目標，役割希望，少集団活動に対する意識を考慮に入れてできる限り多様な生徒で各チームを編成した。授業で取り扱う教材内容を検討する際には，各生徒が抱いている学校に対するメタファーや長所・特技，進路希望，コンピュータや携帯電話の利用状況などを参考にした。

各チームの役割分担には，司会係，音読確認係，学習報告係，記録整理係，計画管理係，情報技術係がある。チームの成員数が少ないところは、役割に掛け持ちがある。個人の役割が着実に遂行されれば全体の学習が促進されることを意図した役割で構成されている。学期の途中で役割の交替はない。

各回の授業で生徒は，開始時に学習課題の指示書（音読確認係読み上げ用）と授業報告シート（学習報告係記入用）を受け取ってチームで学習を始める。チームで協働し自律的に学習を進めることを促進するため，授業者からの説明は昨年より少なくし，その部分をできる限り指示書に明文化した。チームで行う活動内容には，アイデアを出し合うブレインストーミングや内容を深める対話が含まれている。各内容は作業時間があらかじめ決められており，時間内で課題解決を行うための計画管理力も要求される。

一回の授業では，すべての係がチームに同程

表１　１学期の授業内容

時限	内容	活動
1	ガイダンス	チーム学習の意義を説明 コミュニケーションタイプ調査 自己効力感調査
2	チーム結成	チーム内で役割分担を決定 各自のコードネームを決める 写真撮影用の名札を作成 チームの写真撮影
3	即興スピーチ体験 「スピーチマスターを探せ！」	その場で収集したテーマについて１分間の即興スピーチを行う 最初はチーム内で行う。 終了後チーム内で代表を選出し、クラス全体に発表する
4	チーム内ＭＴＧ体験 「ぎりぎりクエスチョン」	質問作成に活かすため，クラスのメンバーの属性を分析 質問のエンターティメント性を考える 質問項目をチーム内で作成・シミュレート
5	プレゼンテーション体験	チーム全員が前に出る チームで検討作成した問題を読み上げる
6	コミュニケーションスキル （聴き方・聴く態度）の習得(1) 「指令を推理　聴き方ゲーム」	個人でワークシートに書き出す チームで意見を共有 クラスで共有 各自「聴き方・聴く態度」についてふりかえりを行う（ワークシート）
7	コミュニケーションスキル （聴き方・聴く態度）の習得(2)	前時に自分たちの中から引き出した「聴き方・聴く態度」を参考に，ロールプレイを行う された側の感想，実際に行った感想，周囲でみていた感想をワークシートに記入
8	説明をする力の習得(1) フィンランド式の論理力トレーニングの教則本にもとづいて作文する	教則本と補足のプリントをもとにチームで学習に取り組む キーワードを最初に書き出して，それを作文し，そこにどんどんキーワードを補足しながら作文に肉付けしていく
9	説明をする力の習得(2)	開始前にチームでうまくやっていくためのコツとして授業者が「客観的に説明できる力」を提示した

・教師の説明時は，パワーポイントのスライドや実物提示装置を必ず使用した
・教師の説明時は，前年度の授業風景の画像をスライドで提示した
・生徒が発表する場合は，実物提示装置を使用し，ワークシートに手書きで書き込んだ内容を投影しながら発表した

度の貢献をするわけではないが，どんな些細なことであっても，すべての役割がなくてはならないことを具体的に説明して各役割の存在意義を高めることは心がけた。

４．結果と考察

１学期末に授業について質問紙調査を 15 項目に対して５件法と自由記述で行った。回答数は，163 名で，その内自由記述に回答した生徒は，87 名であった。

全体の 90%弱の生徒が，授業に興味関心を持ち意欲的に取り組んだと答えている。「１学期の授業を楽しめた」という質問に対して全体の 42％の生徒が，「とてもそう思う」と回答し，「ある程度そう思う」を含めると 86％の生徒が肯定的にチーム学習による授業を捉えている。

自由記述から学習意欲が向上して２学期の授業に対する期待が表明されており，授業で体験した学習スキルがこの授業内に留まらず，今後に役に立つと体感している。

4.1. チーム編成の重要性

「チーム内の他のメンバーの発言を聴くことが面白いと思った」という質問に対して全体の 48％の生徒が，「とてもそう思う」と回答し，「ある程度そう思う」を含めると 90％の生徒が他者の意見に興味を持っている。これは日ごろ話さない人とのコミュニケーションを受け入れる姿勢を強く表すものと考える。

自由記述からも， 学期初めにおいて日常会話を交わすことのない生徒と一緒にチームで活動することにかなり不安を抱えていたことが読み取れる。しかし自分とは異なるタイプの生徒であるということを意識して受け入れ，同じチームで活動することから受けるいい刺激や多様な意見が貴重であると感じる経験を積んだことが理解される。

4.2. 自己認知を促す手立て

「今後自分が身につけるべき課題が明らかになった」という質問に対しては，「とてもそう思う」「ある程度そう思う」を合わせても 36％，50％の生徒が「どちらとも言えない」と答えている。昨年実施した「いいとこみっけ」など他者の分析評価を積極的に行うチーム活動を今年度は実施していない影響が考えられる。自己評価や相互評価の機会を増やし，適格な自己認知を高める必要があると感じる。そのことによって自律的な学習をする上で必要となる資質を高められるものと考える。

５．まとめ

チーム学習という形態は、生徒たちが、安心して意見を言えたり，学習活動に取り組んだりできる授業空間を可能にする。

授業者の説明を指示書に明文化して，教材の共有化をめざした。しかし生徒たちが，指示書からねらいや意図を十分読み取れない場合もあったため，２学期は必要に応じてファシリテータとしての語り，発問，コメントで補足したい。

２学期以降も学習スキルの習得を基本とし，特にシンキングツールや発想法・思考法の習得に焦点をあてたい。さらに習得された学習スキルが他の科目の学習においても活用されるよう定着させたい。

謝辞
本研究は，松下教育研究財団の第 34 回実践研究助成金を受けて行われた。

参考文献

植田一博 他（2000）協同の知を探る－創造的コラボレーションの認知科学－，共立出版，東京

Garton.A.F.(2004)ExploringCognitiveDevelopment:TheChild As ploblem-,Blackwell Publishing Ltd.,U.K.

齊尾恭子 他（2007）高校「総合学習」における学習スキルを高める「チーム学習」の実践，第 33 回全日本教育工学研究協議会全国大会発表論文集

佐藤学（2004）習熟度別指導の何が問題か，岩波書店，東京

土井隆義（2008）友だち地獄－「空気を読む」世代のサバイバル，筑摩書房，東京

西之園晴夫 他（2007）学習ガイドブック 教育の技術と方法－チームによる問題解決のために－，ミネルヴァ書房，京都

美馬のゆり 他（2005）「未来の学び」をデザインする－空間・活動・共同体－，東京大学出版，東京

吉崎静夫（2008）事例から学ぶ活用型学力が育つ授業デザイン，ぎょうせい，東京